

第28回インフォメーション・ミーティング 主な質疑応答

Q：中期経営計画における課題・難所について頭取の考えを教えてください。

A：課題は外部要因と内部要因に分けられる。外部の最大要因は、「道内の生産年齢人口減少」であり、これについては、「AI導入・DX提案と人材育成支援による取引先の効率化」、「キャリアバンク子会社化などによる外国人材の活用」、「スタートアップ・半導体・GX・宇宙など若者に魅力的な産業の支援」、「ワインなどの高付加価値産業の育成支援」、の4つの観点で取り組んでいく。内部要因としては、「効率化」と「預金の更なる獲得」、そして「フロンティアAI対策」。「効率化」は、AI活用やRPAの導入などにより効率化を進め、高付加価値の業務へシフトさせていく。「預金」については、メイン化やポイントサービスなどの利便性向上により道内トップシェアをさらに高めていく。また「AI」は、当行独自の強化とTSUBASAアライアンスでの連携によって対応する。

Q：バランスシートマネジメントの現状の評価は。

A：当行の預貸率はまだ70%台である。今後どの分野について優先的に対応していくかはしっかり考えていきたい。中期経営計画で掲げている預金11.4兆円を実現し、今後さらなる貸出や有価証券運用、成長投資などに振り向けていきたい。現状、LCRなど流動性については問題ないと認識している。今後GXや半導体関連の大規模な投融資が見込まれるが、当行単独では難しい場面も想定され、そこはアライアンスも組みながら当行が先導して支援ができるよう進めていきたい。

Q：他行と比べて流動性預金の比率が高いが、その背景と持続性はどうか。

A：当行は3つの銀行が一緒になった経緯もあり、法人も個人もメイン取引先が圧倒的に多く、預金が集まる仕組みができていることが背景にある。加えて、当行は手元流動性を重視する傾向が強い高齢者の預金シェアが高いことも要因として考えられる。持続性についても、メイン比率が高いことが下支えとなり、さらにこれを伸ばしていくことで、今後も高い水準を持続することができると考えている。

Q：RORAをはじめとした預金の収益管理についてはどのように考えているか。

A：預金についても考慮したうえでRORAの計算をしている。管理上、RACARを使用しているため預金収益や役務収益は加味されているが、今後RAF運用を進めていく中で、より精緻に収益管理ができるようにしていきたい。

次頁へ

Q : P26 のキャピタルアロケーションについて。今後リスクアセットを積み上げていくとのことだが、具体的な内容は。

A : 貸出ボリュームの増加のほか、有価証券において、円債以外の資産（外債や株系資産）を積み上げていく計画としている。

Q : 現金預け金のうち、運用に回せる資金はどういったものか。

A : 所要準備額を除いた日銀預け金から、日銀からの借入金と市場調達（債券レポ等）を差し引いたものとなる。それが足りないとなると、有価証券残高を調整し充当することとなる。

Q : P34 の企業価値担保権を活用した融資について。当該制度を活用した融資がさらに広がる可能性は。

A : 今回の案件では、ハンズオン支援により事業再生の段階を脱した事業者に対し、さらなる企業価値向上に向けた支援として、当該制度を活用した融資を行った。

開始したばかりの制度であり、今後案件が増えていくかは現状不透明だが、今回のような事業再生案件のほかに、スタートアップ案件などが想定され、制度の趣旨に合致する案件については今後も活用を検討していく。

以 上